

山本薫

『眠気と眠りのあいだの狙われた空隙 (アラビア語原題 Fusha mustahafa bayna d-nu'as wa d-nawm)』は、レバノン人作家ラシード・ダイーフ (Rashid al-Daif) の二作目の小説として、一九八六年に発表された (初版は Dar Maktabat Beirut 刊。なお、今回の翻訳にあたっては Red Eye Books Beirut から二〇〇一年に刊行された第二版を使用した)。ここに訳出したのは、全百二十二頁のうち、前半部の五十四頁分にあたる抄訳である。

複数の宗派を抱える中東・アラブの小国レバノンは、微妙な社会的政治的バランスの上に、一時は「中東のパリ」と呼ばれるほどの繁栄を築いたが、パレスチナ人勢力の流入を機にそのバランスを崩し、一九七五年から十五年にわたる内戦に突入した。内戦は荒廃と分裂をレバノン社会にもたらした一方で、内戦下を生きる人々の姿を前衛的な手法で描く、新しい世代の作家たちを生み出した。ラシード・ダイーフはその代表的な一人だ。

ダイーフは一九四五年、レバノン北部のマロン派キリスト教徒家庭に生まれた。若

くして共産主義に傾倒するも、一九七九年に爆弾事件に巻き込まれて瀕死の重傷を負ったことを機に党の活動を離れ、大学での教職と執筆に専念する。この時の体験は彼の作品に大きな影響を与えており、絶対的な真実や大言壮語のイデオロギーを拒絶し、ぜい弱な存在としての個人を微視的に描くところにその特徴がある。

一九八三年に発表した小説デビュー作『暴君 (al-Mustahid)』では、異常が日常になった内戦下のベイルートを舞台に、生ノ性の実感を取り戻したいという妄想的欲求に取りつかれた大学教授の脱線気味な言動や想念が、ブラックな笑いを湛えた筆致で描かれている。

続く本作では、爆弾事件に巻き込まれて生死の境をさまよった著者自身の体験をもとに、前作の執筆時よりも深刻化した宗派間暴力への恐怖と、その根源にあるアイデンティティをめぐる問いが探求されている。舞台は内戦の泥沼化が進行し、シーア派勢力が台頭への懸念が深まっていた一九八四年夏のベイルート。主人公はマロン派キリスト教徒という出自を持ちながらも、左派知識人として西ベイルートに住む人物。物語はこの主人公「私」が、右腕を切断する瀕

死の重傷から回復し、久しぶりに西ベイルートにある自宅マンションに帰宅する場から始まる。彼は時おり極度の眠気に襲われるが、これはどうやら鎮痛剤の影響で、眠っているとも起きているともつかない、混濁した状態にあるためらしい。時間や場所の区切りや妄想と現実との境が失われた非・直線的なこの小説をあえて分かりやすく解釈するとすれば、その「眠気と眠りのあいだ」で主人公が見る白昼の悪夢と記憶のフラッシュバックからなる複数の挿話の集積体ということになるだろう。

いくつもの挿話のあわいから、主人公が右腕切断の重傷を負ったのは、ベイルートの東側から西側へ移動する途中に爆弾事件に巻き込まれたためらしいという事情がぼんやりと浮かび上がってくる。レバノンの首都ベイルートは内戦勃発によって東西に分断され、東ベイルートはキリスト教右派、西ベイルートはイスラーム教徒を主体とする左派とパレスチナ人勢力が実権を握った。キリスト教徒は東側、イスラーム教徒は西側という棲み分けも進み、東西ベイルートを隔てるグリーンラインと呼ばれた境界線とその周辺は戦闘の最前線となって特に激しく破壊され、通行人を無差別に狙撃する

スナイパーが潜む危険地帯と化した。主人公が大けがを負ったのは、東西ベイルートをつなぐ数少ない通行所としてマトハフとバルビールの間の道に置かれていた検問を通過し、東側から西側に入ろうとした途中のことだった。

主人公がこの通行所を横断する場面は複数のバージョンで何度も語り直されるが、その一つである病院での身元確認のシーンは特に印象的だ。意識朦朧とした状態で病院に運び込まれた主人公は、医師から名前を聞かれても、そこから自分の宗派や出身地がわかってしまうことを警戒し、決して本当のことを語らない。「この病院が東側にあって、俺がシリア派かドルーズ派かスナ派かパレスチナ派か左翼だったらどうしよう? (中略) この病院が西側にあって、俺がキリスト教徒かマロン派か無神論者か左翼だったらどうしよう?」。マロン派キリスト教徒という出自を抱えた左翼である主人公は、東西どちらにも安全な場所をもたない。通行所横断の挿話は、こうした主人公の境界横断的なアイデンティティを象徴し、不確定なアイデンティティゆえに危険に晒されうるといふ内戦状況の不条理と恐怖を表現しているといえるだろう。

そうして自宅に戻った主人公の不安をさらに掻き立てるのが、シリア派イスラーム教徒である管理人の存在だ。この管理人自体はどこといって特徴のない男なのだが、主人公はこの管理人の背後に、自分のマンションを占拠しに来るかもしれないシリア派武装勢力の影を見て怯えるのである。ちょうどこの時期、レバノンとイスラエルとの和平条約締結に反対するシリア派勢力の拠点であったベイルート南郊のダーヒヤ地区を、アミン・ジュマイエル大統領を支持する国軍やキリスト教武装勢力が攻撃し、大量の避難民が出ていた。主人公の住む建物にもそうした避難民が身を寄せており、中には空き家の占拠、特に主人公のようなキリスト教徒の家の占拠を狙うものがある。主人公は管理人から聞かされると、

シリア派勢力に対する主人公の恐怖は、突然訪ねてきたあごひげ姿の見知らぬ男たちに殺害されるという挿話、あるいは管理人の親類の男とその殺された兄の未亡人が家に住み着くという挿話などを通じて、くりにかえし表現される。ここで重要なのは、主人公の恐怖は一方的な被害者意識ではなく、自分も潜在的に加害者の立場になりうるという恐怖でもある点だ。自分が狙われ

るのは自分が潜在的な加害者として恐れられているため、あるいは報復のためという恐怖。この妄想的な恐怖もまた、奇怪な挿話の形で執拗に語り直されることになる。これらの挿話を通じて示されるのは、宗派間暴力とは被害者と加害者の立場がいつでも入れ替わりうる、果てしない応酬であるという認識だ。それではこの応酬に巻き込まれる恐怖からどうやったら逃れ得るのか。主人公はこの問題に常に悩まされる。そこで提起されるのが「アイデンティティの偽装」という命題であり、本作の後半部ではこの命題が様々なエピソードを通じて展開されることになるのだが、それについてはまた別の機会に紹介できればと思う。最後に、抄訳を快諾して下さった著者のラシード・ダイーフ氏に心より感謝する。